

第三十八表 阿蘇山噴火

年月日	同上 (西曆)	記事
		<p>延曆十五年(西曆七百九十六年)七月辛亥詔曰比來太宰府言、肥後國阿蘇郡山上有沼其名曰神靈池、水旱經年未嘗增減、而今無、故涸減二十餘丈云々。<small>(日本後紀)</small></p> <p>天長二年(西曆八一四年)夏四月庚辰詔曰(中略)又太宰府言上、在肥後國阿蘇郡神靈池、遭旱澇不增減、而無、故涸渴二十餘丈、延曆四年中有此怪云々。<small>(日本逸史)</small></p> <p>承和七年(西曆八百四十年)四月丙寅<small>二十一日</small>奉授肥後國從四位下勳五等健磐龍神從四位上、七月乙未加從三位。<small>(續日本後紀纂註)</small></p> <p>承和七年(西曆八百四十年)九月癸巳<small>二十一日</small>太宰府言、在肥後國阿蘇郡健磐龍命靈池、洪水大旱、未嘗增減、而涸渴四十餘丈。<small>(同上)</small></p> <p>嘉祥三年(西曆八百五十年)十月辛亥進從四位上肥後國健磐龍命神正三位。<small>(文德實錄)</small></p> <p>仁壽元年(西曆八百五十一年)十月丙午進肥後國健磐龍命大神階加從二位。<small>(類聚國史)</small></p> <p>仁壽二年(西曆八百五十二年)正月戊寅加肥後國阿蘇比咩神從四位下。<small>(類聚國史)</small></p> <p>貞觀元年(西曆八百五十九年)春正月二十七日甲申肥後國授從二位勳五</p>

貞觀六年十月三日夜

八六四^年 一^月 九^日

同 九年五月十一日

八六七 六二〇

等健磐龍命正二位、從四位下阿曾比咩神從四位上。(類聚國史)五月十七日肥後國從四位下阿蘇比咩神、列於官社。(三代實錄)

十二月二十六日己卯太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池去十月三日夜有聲震動、池水沸騰、空中東西洒落、其東方者如布延縵、廣十許町、水色如漿、黏着草木、雖經旬日不消解、又比賣神嶺元來有石神、高四許丈、同夜一石神頽崩、府司等決之龜筮、云應有水疫之災。(三代實錄)

貞觀八年二月十四日庚申。神祇官奏言。肥後國阿蘇大神。懷藏怒氣。由是可發疫癘。擾隣境兵。勅國司潔齋至誠奉幣。並轉讀金剛般若經千卷。般若心經萬卷。太宰府司於城山四王院轉讀金剛般若經三千卷。般若心經三萬卷。以奉謝神心。消伏兵疫。(類聚國史)

太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍神正四位下阿蘇比咩神所居山嶺去五月十一日夜奇光照耀、十二日朝震動乃崩、廣五十許丈、長二百五十許丈。(類聚國史)

貞觀十年閏十二月二十一日庚戌授肥後國從四位上阿蘇比咩神正四位下。(類聚國史)

貞觀十五年(西曆八百七十三年)四月五日己亥授肥後國正四位下阿蘇比咩神正四位上。(同上)

貞觀十七年(西曆八百七十五年)十二月二十七日丁丑。授肥後國正四位下阿蘇比咩神從三位。(同上)

年月日	同上(西曆)	記事
寛喜二年頃	一二二九年 月 日	鎮西阿蘇宮池水涌揚怪異ノ事アリ。(肥後國誌) 明月記寛喜二年庚寅秋七月十六日乙巳之條ニ是月阿蘇社池無シ故而沸騰ストアリ。
曆仁元年十二月二十六日	一二三九 二 八	靈池蛇形ハル、コト三十計リ黒煙大ニ昇リ大小石ヲ雨ス。(肥後國誌)
延應二年	一二四〇	池中ニ大蛇九ツ現ス其中一ツ最大ナリ水逆上スルコト四五丈。(同上)
文永二年十月十五日	一二六五 一一 二一	文永二乙丑十月十五日阿蘇山亦燃出。(肥後國誌)
同 六年七月	一二六九 八 一	阿蘇山ノ御池ヨリ煙立ツ。(同上)
同 七年十一月十五日	一二七〇 一二 六	申時靈池鳴動如大地震、一時之内二十四度、同八年地震如前。(同上)
同 九年三月十日	一二七二 四 一六	寶池鳴動雷ノ如シ、電光耀テ砂礫四方ニ散落池水涌出セリ。(同上)
同 九年十一月朔日	一二七二 一一 二九	晝夜震動已マズ火石降下スルコト雨ノ如シ。(同上)
同 十年七月下旬	一二七三 八 一	砂礫黒雲火石相交ハリ晴天偏ニ暗夜ノ如シ。(同上)
同 十一年	一二七四	文永十一年中池 <small>(一本中寶池トアリ、按ニ是マテノ變ニ某池ト云ハザルハ皆北池ナル歟、凡變アル時北池ノ變ハイツニテモ尤甚ダシ)</small> 涸渴シ火石ヲ雨ラスコト殊ニ甚シク南北郷深谷陸トナリ高岸壑トナリ田野悉ク荒ル、奇變非一。(同上)
弘安四年閏七月	一二八一 八 一	寶池鳴動火石上ル。(同上)
同 九年八月三日	一二八六 八 三〇	申ノ刻(午後四時頃)寶池鳴動蛇ノ形ノ如キ黒雲池中ヨリ上リ乾(西北)ノ方ニ飛去ル。(同上)
嘉元三年三月晦日	一三〇五 五 二	池中ヨリ日輪ノ如キ火三ツ出デ空ニ昇リ坤方(東北)ニ飛去ル。(同上)
正中元年八月十日	一三二四 九 七	寶池ヨリ黒煙火石上ル。(同上)
元弘元年十一月下旬	一三三一 一一 二	十一月下旬ヨリ同三年五月ニ至リ寶池鳴動日夜火石飛ブ且遠近響ヲナ

建武二年正月五日	一三三五	二七	ス。(同) 正月五日鳴動、同六日辰刻鳴動火石砂礫ヲ雨シ。煙中ニ物アリ車輪ノ如シ(輪ハ黒ク中ハ白シ)中北ノ池ヨリ出テ空ニ入、堂舎悉ク破ル。(上同)
同 二年二月二十三日	一三三五	三二六	火石砂ヲ雨ラシ黒煙天ヲ掩フ(上同)
延元四年十二月二十七日	一三四〇	二二	阿蘇山噴火。(日本災異誌)
興國元年正月四日	一三四〇	二一〇	正月四日申ノ刻寶池鳴動黒白ノ煙相交ハリ泊千蒼天火坑光ヲ放チ雷ノ如ク火石ヲ碧天ニ吹上ゲ上下兩所大行事ノ御社火石落掛リテ破損シ満山ノ住僧等驚キ迷フ、通融虚空希代ノ瑞也衆徒等起請文ヲ以テ之ヲ注進ス。 (伊木氏報文)
同 元年正月十九日	一三四〇	二二五	北池ヨリ砂山出現ス高サ山頂ニ出ヅ。(肥後國誌)
正平年中	(一三四六乃至一三六九)		上宮(阿蘇神靈池ノコトナリ)恠異ノコトアリ大衆祈禱ヲナセリ。(上同)
天授元年十一月十九日	一三七五	一二二〇	中ノ寶池鳴動火石上リ靈水沸騰。(上同) 日本災異志ニハ十一月十一日トアリ
同 二年正月二日	一三七六	一三一	戊ノ刻靈水出ヅ。(上同)
同 二年五月二十五日	一三七六	六二〇	五月二十五日ヨリ上宮法施崎(南池ノコト)中央ニ新穴出現シ、濁水砂石涌沸スルコト高サ一丈有餘、同閏五月三日卯刻許俄新穴火坑ヲ變ジ御甌ヨリ火石蒼天ニ登リ西南方ニ棚引ク其後連日白煙巍々斷絶スルコトナシ日ヲ追テ増盛ナリ。(肥後國誌所載阿蘇山衆徒註進文)
同 三年三月二十日	一三七七	四六	巳刻火石ヲ雨シ水大ニ溢レテ堂舎流漂ス。(肥後國誌)
元中四年夏五月二十五日	一三八七	六一九	甲戌阿蘇山靈池砂石濁水涌沸ス、高一丈餘。(上同)
同 五年秋九月八日	一三八八	一〇一六	神靈池變異セリ(上同)

年月日

同上 (西曆)

記事

永享六年三月二十二日

一四三四^年 五月一日

未刻中池ヨリ黒煙大ニ昇リ泥水溢流ス。(肥後國誌)

同 六年四月一日

一四三四 五一八

辰刻中池ヨリ火石大ニ昇ル。(上同)

同 九年十二月五日

一四三八 一九

未刻中池火大ニ起テ天ニ接ス。(上同)

同 十年正月十五日

一四三八 二一八

中池鳴動火大ニ燃ユ。(上同)

文明五年四月十一日

一四七三 五一六

靈池震動而靈煙登空、以後無斷絶也、同年十月ヨリ翌年ノ春ニ至テ火大ニ燃、煙中ニ日ノ如クナルモノニツ形ハレ火石ヲ四方ニ雨シ堂舎多ク壞ル。(上同)

同 十六年十二月十日

一四八五 一五

文明十六年十二月十日ヨリ翌十七年ニ至ル迄火石黒煙大ニ昇リ北池中ニ

砂山出來ス、大宮司惟忠薨、僧徒等大半去山。(上同)

永正二年正月

一五〇五 二

黒煙火石大ニ昇ル。(上同)

同 三年三月三日

一五〇六 四六

阿蘇御嶽御鳴動、火石アガル。(八代日記)

大永二年正月九日

一五二二 二二二

火石黒煙大ニ昇リ砂山ニツ池中ニ出來ス其山ニ日ノ如キモノニツ出ヅ。

(肥後國誌)

天文二年六月十五日

一五三三 七一七

煙大ニ昇リ泥水四方ニ溢流ス。(上同)

同 十一年閏三月五日

一五四二 四二九

阿蘇山御メイドウ、火石卯時、又午時。(八代日記)

永祿元年

一五五八 | |

阿蘇岳新穴出來、二年ニモ新穴出來ス。(上同)

同 五年二月上旬

一五六二 三 |

寶池黒煙砂礫硫黄上ル白川濁テ衆魚死ス。(上同)

同 六年四月一日

一五六三 五三

永祿六年癸亥四月一日己酉阿蘇山御鳴動之由申候。(八代日記)

同 七年十一月

一五六四 一二 |

火大ニ燃、黒煙大ニ昇ル。(上同)

天正四年十月十五日	一五七六	一一一五	火燃黑煙天ニ昇ル。(上同)
同 十年正月十五日	一五八二	二一七	黑煙火石大ニ昇ル。(上同)
同 十一年十一月十一日	一五八三	一二二四	寶池靈水湧出、推流元山大師開山之像等及板敷。(上同)
同 十二年七月	一五八四	八	砂石硫黃降り南郷色見邑荒蕪。(上同)
同 十五年	一五八七	一	火大ニ燃エ砂山ニツ池中ニ出來ス。(上同)
文祿元年	一五九二	一	黑煙上リ砂山出來セリ。(上同)
慶長三年十二月	一五九八	一二	慶長三年十二月ヨリ同四年ニ至ル迄砂礫ヲ降ラシ黑煙昇ルコト多シ。(上同)
同 十六年	一六一一	一	變異同前。(上同)
同 十七年七月十五日	一六一二	八一二	阿蘇山噴火。(日本災異志)
同 十八年六月二十二日	一六一三	八八	寶池苦水涌出黑煙天日ヲ遮リ砂石郡中ニ降ル。(肥後國誌)
元和六年五月三日	一六二〇	六三	寶池晴天ニ苦水涌出ス。(上同)
寛永八年十一月	一六三一	一二	寶池鳴動黑煙上リ苦水漲奔寺川ノ水熱湯ノ如シ、行人絶ユ。(上同)
同 十四年八月十一日	一六三七	九二九	十一日及ビ十七日黑煙山頂ヨリ上リ砂石硫黃ヲ降ラス。(上同)
慶安二年六月	一六四九	七	六月ヨリ七月ニ至ル迄鳴動雷ノ如ク火石上ルコト前ノ如シ。(上同)
寛文八年正月	一六六八	二	正月鳴動、同七月鳴動、同十一月鳴動黑煙火石昇リ苦水溢レ出テ、其下流猶熱湯ノ如ク行人涉ルコトヲ得ズ。(上同)
延寶三年正月二十二日	一六七五	二一六	已刻鳴動、黑煙有光火石上ル。(上同)
天和三年五月	一六八三	六	四月五日寶池邊鶴ニ翼死ス、五月鳴動雷ノ如ク泥土沸騰ス。(上同)
元祿四年四月	一六九一	五	四月ヨリ北池鳴動雨砂、越月不止。(上同)
同 四年五月二十七日	一六九一	六二三	已刻ヨリ午刻ニ至ル迄テ鳴動甚シク火石大ニ昇リ黑煙東北ニ棚引キ坂梨

年月日

同上(西曆)

記事

元祿四年六月十七日

一六九一年七月二日

村宮地村ノ間晦暝ニシテ燭ヲ秉テ至ル行人路ニ迷ヒ石ニアタル飛禽ハ煙ニ咽ヒ死スルアリ。(肥後國誌) 元祿四年此年阿蘇ノ煙リ、前代未聞ニアレサセラレ候、五月日、阿蘇中ヤミトナリ、晝タヒマツヲトモス。(渡邊玄) 噴火石降ルコト雨ノ如シ。(泰平年表)

寶永五年八月四日

一七〇八年九月一七

八月四日阿蘇山ノ池水赤キコト朱ノ如シ魚多ク死ス。(泰平年表) 八月ヨリ南池水色變ジテ赤クナリ十二月ニ至テ涸渴ス。(肥後國誌)

同 六年正月四日

一七〇九年二月一三

鳴動シ。池傍ニ新池出來ス大ナルハ十五ヶ所、小ナルハ算フベカラズ、泥土逆上スルコト三四間苦水溢流シ炎火砂石大ニ昇ル。(同上)

明和元年臘月

一七六五年一月一

臘月中旬ヨリ山上御池ノ煙常ヨリ強シ。(肥後國誌)

同 二年四月二十七日

一七六五年六月一五

四月十八日、十九日兩日、豊後府内別府震動ス、同從ニ二十七日ニ至ニ五月十日、肥後阿蘇山燒ル、近國熱キ砂降ル。(温故年表) 二年正月上旬ヨリ秋ノ末迄御池鳴動シ……三四里ノ間ハ戸障子ニ響キテ晝夜安眠セズ豊後鶴崎府

安永年間

(一七七二乃至一七八〇)

内筑後肥前薩州、當國(肥後)八代葦北天中迄數十里ノ間砂降リタリ、別テ當郡(阿蘇)箱石坂梨乙姫永草邊砂強ク降レリ。(伊木氏報文)

文化元年八月二日

一八〇四年九月五

八月二日神池鳴動ス、同十一月山鳴震小池忽焉出來ス。(伊木氏報文)

同 三年七月十七日

一八〇六年八月三〇

阿蘇山噴火。(日本災異志)

同 十一年

一八一四年

阿蘇山炎上ス。(伊木氏報文)

同 十二年

一八一五年

文化十二年ノ變ハ安永ノ變ニ亞ギテ最モ甚シク……先ヅ神池ノ水ハ常ニ

文政九年九月二日
 同 九年十月二十三日
 同 十年四月
 同 十年十二月
 同 十一年五月
 天保元年二月
 同 元年六月二十三日

一八二六一〇 三
 一八二六一一 二二
 一八二七 五
 一八二八 一
 一八二八 六
 一八三〇 三
 一八三〇 八一

湛へシヲ數々涸テ四月ノ末ニ至リテハ皆涸竭キテ池底ニ火坑出來其火ノ勢盛ニシテ坑邊ハ燒焦サレテ紫紅色トナリ火坑ノ中ハ鳴震ヒテ硫黃ノ氣ヲ甚シク吹上ゲツ、アリケルヲ、五月始メニナリテ黑煙大ニ昇リ、日毎ニ強クナリ、六月ニ至リテハ其煙リノ廣サ二里許道路ヲ打掩ヒ其下ハ晝モ夜ノ如シ、素ヨリ池ノ邊リ一二町ノ間ハ火石ヲ雨降ラシ煙中ニハ火煙ヲ吹キ石ノ同時ニ吹上ゲラル、狀ハ煙ヲ離レテ群鳥ノ如ク煙中ニテハ皆火ノ玉ニシテ相撃チ發スル光ハ電光ヨリモ銳ク其音ハ雷霆ニ能ク似タリ斯クテ九月比ヨリ漸々穩ニナリシナレド山下田畑原野共ニ皆霾ニ埋レテ荒果タリシカバ何ノ代ニテモ靈池ノ水涸テ底ニ火坑出來勢強ク鳴震フコトアラバ恐惶シテ祭禱怠ルベカラズナン。(肥後國誌)

阿蘇山噴火。(日本災異志)

火焰砂礫黑煙池上ニ昇リ全山鳴動シ堂舎悉ク破ル。(伊木氏報文)

灰降り原野荒果タリ。(同上)

鳴震火焰天ヲ衝キ四方ニ砂礫ヲ雨降ラシ新穴一ノ鳥居ノ南側ニ出來セリ。(同上)

五月上旬阿蘇山噴火シテ大石硫黃灰砂ヲ雨ラスコト糠糲ヲ簸スルガ如ク皆ナ田畝ニ堆積シ阿蘇郡ノ民爲メニ糧食ヲ失フ其他合志益城飽田託摩四郡ノ田畝モ亦大ニ損害スト云フ。(日本災異志)

黑煙天ニ昇リ砂礫ヲ雨ラセリ。(伊木氏報文)

神池鳴震火焰灰ヲ上シ咫尺ヲ辨スルコト能ハズ翌朝數百尋高キ山西方ニ

年月日

同上(西曆)

記事

安政元年正月二十九日

一八五四^年 二二六^日

明治五年十一月一日

一八七二 一一一

同 七年二月七日

一八七四 二七

同 十七年三月二十一日

一八八四 三二一

出來セリ。(伊木氏
報文)

山鳴震濁水ヲ湧沸ス。(上同)

鳴震濁水涌沸シ硫黃採リ數人ヲ死ニ至ラシム、其後鳴動數々ニシテ黑煙天ヲ衝キ火石晝夜相撃チ其聲雷鳴ノ如シ苦水四方ニ溢流セリ。(上同)

阿蘇山噴火。(日本災
異志)

同 二十七年三月六日

一八九四 三六

三月廿一日午前七時五十分ヨリ凡ソ一時間許リ阿蘇大ニ鳴動シ……既ニシテ山上炎焰天ヲ衝キ黑煙ハ西風ニ從ヒ……霾ヲ降ラスコト忽ニシテ寸餘ニ及ブ、……四月三十日迄ハ噴出ノ景況格別異ナラズ、……五月一日朝ヨリ俄ニ硫煙降霾減少ス、同十七八日ニ至リ稍ヤ平常ニ復シタル景況ナリシガ六月六日ヨリハ再ビ噴火烈シク、同十二日夜ヨリ翌十三日正午迄ハ鳴動雷聲ノ如ク硫煙噴出ス、……其坑ハ元來ノ三池中北位ノ坑中最北ノ下底新タニ一洞穴ヲ破裂シタルモノナリ……。(伊木氏
報文)

六日夜阿蘇山鳴動ス遠雷ノ如シ、色見村ニテ、七日夜午後八時頃微シク霾ヲ降ラス、吉田新町ニテハ十一日午後一時、十二日及ビ十三日朝ニモ降霾アリ。十三日午前十一時十二分又々阿蘇山鳴動、黑煙高ク噴出シ東南ニ飛散ス、午後零時二十分ニ至リ噴煙漸ク減シ同二時ヨリハ平常ニ復セリ午後三時更ニ震動累々タル黑煙天涯ニ昇リ……噴火口ヲ檢スルニ舊新二口アリ新口ハ猶噴煙シ、舊口ハ僅ニ煙ヲ洩ラスニ過ギズ……三月四日夜ヨリ、既ニ細微ノ鳴動アリタリト云フ。(上同)

同 二十七年五月二十四日

一八九四

五二四

三月七日午前五時鳴動降灰、同日午前七時十三分、八時二十三分、九時四十分、十時二分、十時二十五分ニモ鳴動アリ。三月十三日午前十時四十分ニモ鳴動噴出アリタリ。(大森「近年日本ニ於ケル火山噴出表」)

六日ノ夜ヨリ阿蘇山下ニ於テ屢々遠雷ノ轟クガ如キ響キアリ七日午前七時ヨリ同十時二十五分マデノ間ニ都合七回ノ鳴動アリ、就中十時二十五分ノ鳴動ハ非常ニ激烈ニシテ山下ノ村落ハ戸障子ノ震ヘルヲ見タリト。

(明治二十七年三月九日九州日々新聞)

七日午前五時頃ヨリ阿蘇山ノ鳴動大小數回アリ。黒川村字箕ノ手ヨリ湯ノ谷岐路ニ至ル三十町許ノ所霾降り積ムコト三分餘。阿蘇山上小屋(神池ヲ距ルコト八町餘)ニ居住スル者ニ聞クニ六日ノ夜非常ニ鳴動アリテ神池近傍砂石ヲ噴出スル音轟然凄シカリシト。(熊本測候所報告)

本月六日夜阿蘇山鳴動ス、翌七日十時ニ至リ又鳴動シ僅ニ霾ヲ降ラス、十一日午後一時吉田新町ニ霾ヲ降ラス、十二日ヨリ今十三日ノ朝ニ至リ時々霾ヲ降ラス、今朝ノ如キハ吉田新町連檐ノ家屋上霾ヲ堆積シ風之ヲ捲キ滿街爐灰ヲ撒スノ觀アリ、午前十一時十二分ニ至リ又爆發シ黑煙高ク噴出シ二十分間鳴動止マズ、家屋爲ニ振フ、其後引續キ黑煙天ニ漲リ午後零時三十分ニ至リ噴煙減シ、同二時後ハ山嶺晴朗平日ノ如ク甚ダシキ鳴動ナカリキ、云々。(熊本縣廳報告)

二十四日ノ夜半突然百雷ノ一時ニ落チタルガ如キ響ヲ傳ヘ、降灰ノ爲メ蠶桑ノ被害頗ル多シ。(明治二十七年六月二日毎日新聞)

年月日	同上(西曆)	記事
<p>明治二十七年六月二十三日 同 二十七年八月三十日</p>	<p>一八九四^年 六^月二三^日 一八九四 八三〇</p>	<p>阿蘇山ハ震動少コシモ歇マザルノミカ近日ハ降霾ノ量モ平常ニ倍加シ其中ヨリ間斷ナク小石ヲ降ラシ時アリテハ巨大ノ石ヲ噴出スルコトアリ。 <small>(明治二十七年八月二十五日大阪朝日新聞)</small> 午後八時、大鳴動、降灰。<small>(大森「近年日本ニ於ケル火山噴出表」)</small> 先月來ノ鳴動ハ一時止ミ居タリシガ三十日午前五時頃ヨリ再ビ黒煙ニ霾ヲ雜ヘテ雨ノ如ク降り來リ其勢敢テ春頃ニ劣ラズ午後十一時頃ヨリハ火煙ト共ニ鳴動甚シク、殊ニ本月四日ノ如キハ一層甚シク阿蘇谷地方ハ傘ヲ用キ眼鏡ヲカケザレバ外出スルコト能ハザル程ナリ。<small>(明治二十七年九月七日熊本新聞)</small> 阿蘇山ノ荒レハ近日ニ至リ益々甚ダシク、昨今ハ市中マデ「ヨナ」ヲ降ラシ天色モ爲ニ暗澹タル有様ナルガ、「ヨナ」ハ島原迄モ及ビ月ノ色モ爲ニ模糊タリト云フ。<small>(明治二十七年十月二十日熊本新聞)</small> 四五日以前ヨリ阿蘇山頻リニ鳴動シ時或ハ霾ヲ降ラスコトアリ。<small>(明治三十年三月三日宮崎新報)</small></p>
<p>同 三十年二月 同 三十九年六月七日</p>	<p>一八九七 二 一九〇六 六 七</p>	<p>七日午後五時頃爆發ス、舊噴火口ヲ距ルコト南ニ三百間ナリ中央火口丘トノ間ニアル千里ヶ濱ト稱スル火口原ニ起リタルモノニシテ火口ハ口徑横四間、豎十間アリ。<small>(明治三十九年七月二十六日大阪新聞)</small> 阿蘇中岳ノ噴火口ハ南北ニ連レル大小五個ノ火口ノ連合ニヨリテ成レル一ノ大噴火口ニシテ、此火口ノ外圍ハ圓錐形ノ斜面ヲシテ外方ニ斜下シ其外ニ一ノ外輪山アリ、此外輪山ト前記圓錐丘ノ間ニ南方ニアリテ一平</p>

大正五年四月十九日

一九一六 四一九

原アリ之ヲ千里ガ濱ト云フ、先ヅ火口原トモ稱スベキ地ナリ此千里ケ濱ニ面シタル火口丘ノ斜面約二十度計リノ地ニシテ火口ヨリ遠カラザル處ニ新火口ヲ生ジタリ、偏圓形ニシテ長サ四間幅一間半計リナリ其噴出ノ初メハ其大サ遙ニ小ナリシガ次第ニ擴大シテ此ニ至レルナリ。噴火ノ當時中岳ノ活火口ヲ距ル事五六町ナル茶小屋主人ハ火口ノ方ニ向テ大ナル響ヲナシテ噴出セルモノアルヲ聞ケリ、此音響ハ餘リ大ナラズシテ、二三里ヲ離レタル山下ノ人家ニテハ一モ轟音ヲ聞カザリシト云フ、此時ハ多少ノ降灰アリシナルベキモ前記小屋ニハ一モ飛ビ來ラザリキ。(地質學雜誌岩崎理士學)

鳴動降灰ス。(大正五年四月二十日東京朝日新聞)

第三十九表 霧島山噴火

年月日

同上 (西曆)

記事

天平十四年十一月二十三日

七四二年 十一月二十八日

十一月壬子大隅國司言、從今月二十三日未時、至二十八日、空中有聲

如太鼓、野雉相驚地大震動、丙寅遣使於大隅國檢問并請聞神命。(續日本紀)

延曆七年三月四日

七八八 四一八

七月己酉太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國贈於郡曾乃峯上火炎大熾、響如雷動、及亥時火光稍止、唯見黑煙、然後雨沙、峯下五六里沙

石委積可三二尺、其色黑焉。(續日本紀)